Bulletin of Beppu University Junior College, 27(2008)

論　文

# 保育者養成における表現技術向上に関する一考察
## ―大型紙芝居制作と上演をツールとして―

仲　嶺　まり子

A Consideration of Improvement in
Expressive Skills for Child-care Workers in Educational Process
―Through The Activities for Producing and Performing
The Large Picture-story Show―

Mariko NAKAMINE

### はじめに

「最近の若者は挨拶をしない，必要な連絡をしてこない」等若者のコミュニケーション力不足についての話題を耳にすることが多いが，果たして彼らはこのことについてどのように感じ捉えているのであろうか。

当短期大学部初等教育科１年生192名（平成17年度入学者）を対象に自身のコミュニケーション力の有無についてアンケート調査を実施したところ，「コミュニケーションは苦手である」と答えた学生は27名で，それ以外の学生は「コミュニケーションは普通にできていると思う」との回答であった。

我々は，日常の挨拶はもちろんのこと他者理解や共感，自分の考えや思いを相手に伝えるなど，様々な場面に応じた双方向的な表現力について総じてコミュニケーション力と捉えているが，学生たちの多くはこれまでの経験による身近な友人や家族，知人，教師等との関係をイメージし，コミュニケーションというものを捉えているのではないだろうか。つまり，コミュニケーションという言葉に対する総合的な捉え方と部分的な捉え方の違いが学生と一般社会との意識の違いを生み出していると考えられる。

このようなことをふまえ，保育現場でのコミュニケーションについて考えてみると，まず乳幼児，保護者，職員等との関わりがあげられるが，人的対象だけではなく保育に必要な様々な用具や教具，身の回りの事物等とどう関わるかによっても保育内容の充実度が図られていると思われる。従って，保育者養成において学生の総合的なコミュニケーション力の向上を図ることは，保育技術習得につながるひとつの手がかりになるのではないかと考えるのである。

筆者は，そのコミュニケーション力の向上を図るひとつの手段として，筆者の主催する表現遊び研究会所属の１年生40名（平成17年度入学者）と紙芝居の制作上演活動に取り組んだ。

以下に，それらの活動内容および活動を通しての考察を述べたいと思う。

### 紙芝居を演じることの意義

紙芝居は従来，ひとりの演じ手により演じられることが多く，その演じ手の身振りや表情，語り口により作品の世界に引き込まれていく。

つまり，工夫して演じることが演じ手に求められ，そのことが観客とのコミュニケーションへとつながっていくのである。

筆者は，学生たちが紙芝居を上演し，観客（子どもたち）とのコミュニケーションを体験することができた時，共感や演じることの喜びを知ることで，自身の保育者像を描きながら保育技術習得への積極的な取り組みが可能になるのではないかと考え，紙芝居の制作と上演活動を計画した。

しかし，学生がそれらの活動に取り組む際には，人数や活動時間の関係から，グループ形態で行わざるを得ず，従来の一人の演じ手による紙芝居とは異なった状況になるのである。そのため，グループ活動の利点を最大限に生かして取り組まなくてはならない。

もともと人前で演じた経験のない学生が多いため，仲間と一緒に観客（子どもたち）と向き合うことは，人前に立つことへのプレッシャーを多少なりとも軽減できると思われるが，グループでの上演は，役割分担や台詞の連携練習が不可欠のため，自ずと互いに緊密なコミュニケーションが必要である。

さらに，自分なりの表現をすることと，他とのバランスに配慮しながら表現するというリスクを負うことで，今までにないコミュニケーション場面を体験するであろうことが容易に想像でき，完成までには相当の時間を要すると思われた。

また，作品内容や観客を想定しながらの取り組みは，上演経験のない学生達にとって困難であることが推察でき，台詞のやりとりだけでは表現の深まりや作品への興味が持続されないのではないかと感じた。そこで，その紙芝居の内容に関連した手遊び歌や効果音の挿入を計画し，学生達が保育技術を意識しながら楽しく表現できるように試みた。

しかし，まついのりこ氏は著書「紙芝居の演じ方　Q&A」の中で，[1]「何人かで演じ分けると作品内容への深まりが薄れ，…ストーリー運びに流されてしまう」また，[2]「効果音を安易に入れないようにしよう」[3]「演じ手は紙芝居の世界を自分のパーフォーマンスの道具に使ってはならない」とも述べている。従って，それらのことに留意しながら，挿入には様々な検討を重ね，観客（子どもたち）が演じ手とともに作品を楽しめるようできるだけの配慮をおこなった。

また，グループで上演するため，並版の紙芝居を使用することができず，グループ上演にふさわしい大型紙芝居を制作することにした。制作に当たっては手遊び歌や効果音が挿入しやすいと思われる物語を選び，それを紙芝居向けにアレンジすることにした。

既製の物語のアレンジという方法を選択した理由は，物語の創作から自分たちでおこなうことはそれぞれの読書経験や作文経験の違いもあり，入学間もない１年生にとっては非常に困難な作業であると感じたからである。しかも限られた期間内での創作活動であったため，今回は様々な作家の既製作品の中から題材を選ぶことにした。

また，これらはあくまでも学生の指導と研究のみに使用することとし，上演も大学内の附属幼稚園園児を対象に計画した。

## 紙芝居を制作することの意義

研究会活動は週１回水曜午後に行われ，制作予定期間は，平成17年５～６月（原作の作品選び・台本作り），６～７月（下絵の考案・大型紙芝居の制作），９～10月上旬（上演練習），10月中旬～下旬（上演）とし，４つのグループ毎に，次の９つの制作過程に沿って活動に取りかかった。

1．紙芝居として創作可能な物語を絵本等の作品から選ぶ。
2．選択した作品から紙芝居の台本を作成する（台本作成過程においても効果音や手遊び

1　まついのりこ「紙芝居の演じ方　Q&A」童心社 2006　p58
2　前掲書　p73
3　前掲書　p75

歌の挿入に適した箇所は抜き出しておく)。
3．紙芝居にアレンジした内容に即し各場面の下絵を原作を参考にしながら描く。
4．縦80cm・横100cmの用紙に絵を描き，色塗りをする。
5．絵が仕上がったら裏にダンパネを貼り補強する。
6．役決め（役割分担）を行う。
7．手遊び歌や効果音の挿入箇所，楽器や歌の選曲・作詞を行う。
8．グループ練習
9．附属幼稚園で上演する。

まず，絵本から物語を選ぶ時に留意しなければならないことは，紙芝居にアレンジできる内容の作品かどうかを十分吟味して選ぶということである。絵本の内容そのままを紙芝居に移した場合，その作品の内容や意図が伝わりにくくなる場合があるからである。これは絵本と紙芝居の特徴の違いによるものであるが，その原因として次のようなことが考えられる。

紙芝居は，規模は小さいものの劇場としての要素を備えている。そのため多くの紙芝居は舞台を使用して上演されている。もちろん映画や演劇，ミュージカル等を劇場に見に行くのとは異なり，自分の所にやってきた身近な劇場と捉えてよいのではないだろうか。このことをまついのりこ氏は，[4]「作品世界が“現実空間に出て広がる”」と表現している。そのような意味において絵本とは異なった要素を持っているのである。

また絵本を読む時，子どもたちはお気に入りの作品を何度も繰り返し読んだり，親や保育者に読み聞かせをしてもらいながら，自分なりにお話の世界をイメージし，絵本の中へと入っていく。また，絵本のページをめくりながら，前の場面に戻ることも，ページを飛ばしてみることもでき，イメージの再確認や次への興味をそれぞれの思いに合わせて見ることができる。

一方，紙芝居は観客を対象に演じることを前提とし，演じ手が一枚ずつ抜き取りながら次の場面への興味を持たせていくので，演じ手とのコミュニケーションによって，より作品を深く楽しむことができるのである。

これらのことをふまえ，絵本から紙芝居へアレンジする時には，(A) 台詞部分は，観客に話しかけることを意識しながら言葉を並べ変えていく。(B) 場面の情景やあらすじが理解できるように，わかりやすいナレーションを挿入したり，必要な場合は文章を変える。

というようなことに留意した作業が必要であり，これらの転換作業をおこなうことで，学生達の文章構成力や表現力，言葉表現に対する知識や意識の向上を図ることができるのではないかと考えるのである。

その他にも，絵を描いたり効果音や手遊び歌の挿入では，文章表現との関連を十分検討しなければならないため，領域を越えての総合的な表現技術のあり方を経験することができ，保育技術の本質を学ぶきっかけになるのではないかと思われる。

## 紙芝居創作実例

学生達が選んだ作品のひとつ，絵本「ひまわに」（あきやまただし作　PHP研究所）を原作にした紙芝居「くりわに」の制作過程を振り返りながら，その取り組みの有用性ついて考察していきたいと思う。

1．まず，上演予定時期が秋であったため，夏向きのこの作品は適切でないのではないかということが問題になったが，どうしてもこの作品を紙芝居にしたいという学生の思いから，“ひまわり”のデザインを“くり”に変えた「くりわに」キャラクターが作られた。
2．物語の台本作りでは，“くりわに”をどう登場させるか，原作の内容と“くりわに”キャラクターがマッチしない部分についての内容変更に苦慮しながら，一ヶ月以上をかけて台本が創案された。
3．原画を参考にしながら“くりわに”の台本

4　まついのりこ「紙芝居の演じ方　Q&A」童心社 2006　p33

に合わせたそれぞれの場面の下絵を考案していくのだが，紙芝居の場合は右に絵を抜いていくため，左右を変える等構図の検討をおこなわなければならず，話の内容と絵とのイメージを合わせるために，台本の読み込みが何度もなされた。台本の読み込みを繰り返すうちに，配役等もスムースに決められていった。

4．大型サイズの用紙に絵を描き，色塗りが仕上がったら，裏面にダンパネを貼り補強した。下絵の考案の時はリーダーを中心に２，３名でおこなっていたが，絵を描く時には２枚ずつ程度を分担作業し効率を上げるよう協力しあっていた。

5．まず台本通りの読み合わせを繰り返しおこないながら，効果音と歌の適切な挿入箇所を模索した。歌は簡単な振り付けのできる短い曲，効果音はおもしろい音の出る物や身近な楽器から選ぶようにした。

6．実際に手遊び歌，効果音を挿入しながら紙芝居を演じる練習をおこなう。ナレーション，台詞，歌，振り付け，効果音の間やイントネーション等について意見を出し合いながら作品の完成度を高めていった。特に，他グループよりはいい出来にしたいという競争心からか，練習に熱が入っていた。

以上１～６が紙芝居「くりわに」の簡単な制作過程である。

まず，学生達がこの絵本「ひまわに」を選んだのは，①文章がわかりやすい②内容と絵がマッチしていてわかりやすい③絵がユニークで大胆なため，自分たちにも描けそうだ④何よりもこのお話がおもしろく気に入ったという理由からであった。

そのため，どうしてもこの物語を紙芝居にしたいという思いから，上演季節にふさわしい「くりわに」という新キャラクターを作り出したのである。

また，いくつかの場面で次のような内容の変更がおこなわれ台本制作がなされた。

（原作絵本の物語始まり部分）

ひまわには　ひまわりみたいな　わに。
ひまわには　ひまな　わに。
きょうも　ひまわりばたけで　おひるね。

おひるねが　おわると
おさんぽの　じかん。
ひまわには　ひまだから
ゆっくり　あるきます。

（紙芝居台本の始まり部分）

ナレーター
これから“くりわに”の紙芝居を始めます。
はじまり，はじまり～。
（拍子木挿入）
（挿入歌：向こうのお山にくりがとれた）

くりわに
ぼくは“くりわに”，栗からうまれた“くりわに”
ぼくには不思議な力があるんだ。
みんなを元気にする不思議な力をもっているんだ。
だからぼくには，たぁくさんの友だちがいます。
じゃあ，これからぼくのお話を聞いてくださいね。

ナレーター
ある日のこと，大きな栗の木から一つの栗が落ちました。
「ポトン，ポトン，コロコロ，コロコロ，パカッ！！」
（効果音：マルチトーンタング）
その拍子に栗がわれて，中からなんと“くりわに”くんが出てきました。

くりわに
「あいたたたたたあ～，何だよう，いい気分で寝ていたのに。」
「目も覚めたし，天気もいいし，散歩にでもいくか。」

ナレーター
そう言って，くりわにくんはトコトコ，トコトコ散歩に出かけました。
（効果音：ウッドブロック）

物語のはじまり部分での文例であるが，絵本では，ひとつひとつの言葉が大切にされ，短いセンテンスの中に見事に情景があらわされている。

紙芝居向けのアレンジでは，観客を意識した語りかけるような言葉が使われ，これからはじ

まる物語への期待感が折り込まれている。

また，イメージが描きやすく学生達自身も表現しやすいように，擬態語を使うなどの工夫もなされている。

次の２例は，“くりわに”が散歩の途中で“寒さで震えているライオンのおじいさん”と“歯が痛くて泣いているゴリラ”に出会った場面である。

（原作絵本のライオンに出会った場面）

さむそうに　ふるえている
ライオンが　いました。

「おじいさん　だいじょうぶ？」
ひまわにが　いいました。
すると　おじいさんライオンは，
「おやおや，ふしぎじゃのう。
あんたの　かおを　みていると，
からだが　ぽかぽかと
あたたまってくるわい」
と　いいました。

（紙芝居台本のライオンに出会った場面）

ナレーター
　トコトコと歩いていくと，寒そうに震えているライオンのおじいさんがいました。
全員で（振りを付けながら）
　「うぅうぅうぅう～，ぶるぶるぶる，クッシュン！」
くりわに
　「ライオンのおじいさん，だいじょうぶ？」
ライオン
　「ちょっと風邪をひいちゃってねぇぇぇ～。」
全員で（振りを付けながら）
　「ヘッヘッヘッ，クシュン！」
くりわに
　「おじいさん，ぼくの顔を見てごらんよ！」
ライオン
　「どれどれ，何やらニコニコしとるけど，変な顔じゃのう。
　おう，不思議じゃ。
　あんたの顔を見ていたら元気がでてきたぞ。」
全員で（振りを付けながら）
　「がおぉぉぉぉぉ～！」
ライオン
　「何だか力が湧いてきたぞぉぉぉ～。」
全員で（振りを付けながら）
　「がおぉぉぉぉぉ～！」
くりわに
　「うわぁぁぁ～，おじいさんこわいよぉぉぉ～。」
ナレーター
　くりわにくんは，あわてて逃げました。

（原作絵本のゴリラに出会った場面）

ないている　ゴリラが
いました。

「どうして　ないているの？」
ひまわにが　にっこり　わらうと，
ゴリラも　おもわず
わらいました。
「ぼく，はが　いたかったの。
でも　きみの　かおを　みていたら
わすれちゃった」
ゴリラが　いいました。
「そうなの？　よかったね」

（紙芝居台本のゴリラに出会った場面）

ナレーター
　またトコトコ歩いていくと。
ゴリラ
　「わぁーん，わぁーん」
くりわに
　「どうして泣いているの？」
ゴリラ
　「歯がいたいよぉぉ～。」
全員で
　「ギリギリ　ギリギリ」（効果音：ギロ使用）
ゴリラ
　「歯医者イヤだよぉ～。」
全員で
　「ギリギリ　ギリギリ」（効果音：ギロ使用）
くりわに
　「でも…。歯医者に行ったら大好きなバナナがいぃっぱい食べられるよ。」
ゴリラ
　「えっ！　本当！？」
ナレーター
　ゴリラは大好物のバナナを思い出して，思わず笑いました。
ゴリラ

「君の顔を見ていたら元気が出てきちゃった。歯医者に行ってくるね。」

ナレーター

そう言ってゴリラは，歯医者に出かけました。

（効果音：太鼓使用）

ナレーター

歯医者に行ってすっかり歯のよくなったゴリラは，バナナをたくさん食べました。

（挿入歌：くいしんぼうのゴリラ）

このような紙芝居へのアレンジをおこないながら，台本作成が進められていった。

台本が完成し，下絵の制作に取りかかった時，原作絵本の絵をそのまま写すと，文章と絵とのストーリー経過が合わないのではないかという意見が出された。つまり，この原作絵本は向かって右にページを進めていくが，紙芝居では絵を観客から向かって左へ抜いていくため，“くりわに”の構図は向かって右から左に経過が描かれている方が見やすくて文章とも一致するのではないかという提案がなされたのである。

このため，原作の構図を左右逆転させるなどの工夫をおこない，文章と絵とが一致するよう試みがなされた。これは，前述の「ライオンに出会った場面」（図①，②）「ゴリラに出会った場面」（図③，④）の２場面で出された意見である。

このことは必ずしも，すべての場面に適用されるとは思われないが，このように文章内容と絵の構図との関連ついて考えることで，より作品を深く読むこととなったのである。

下絵が出来上がると，早速大型用紙に絵を描く分担作業にとりかかった。この作業は，思うような色が出せずに困っている姿が見られたこともあったが，グループ全員で協力しあい，これまでの中で最も楽しく活気溢れる作業のようであった。

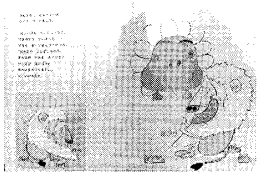
紙芝居が仕上がると，上演練習と効果音，手遊び歌の挿入についての検討をおこなった。台本作成時に効果音や手遊び歌の原案は考えていたが，場面に即した歌詞を創作したり，イメージに合った楽器を探すのは学生達だけでは困難であったため，教師も加わり場面にふさわしいと思われる様々な楽器や歌の提供をおこなった。

歌の振り付けについては，学生達からいろいろなアイディアが出され次々と振りが決まっていったが，楽器については，より望ましい音を出すために，教師が奏法の指導を繰り返しおこなった。

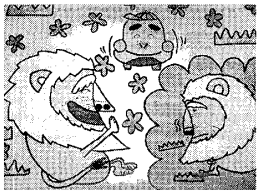
また，子どもたちの前で上演する時には，「前を見て台詞をはっきりわかるように話すこと」ということを一番の留意点として練習をおこなったが，本番では恥ずかしいという気持ちからか，はじめのうちは下を向いて小さな声で演じる学生が多かったが，途中何度も注意を受けながら徐々に演じることに夢中になっていった。

＜構図の左右を逆転させた場面＞

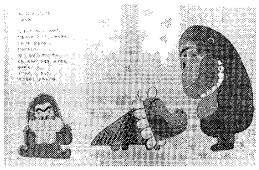
①原作絵本（ライオンに出会った場面）



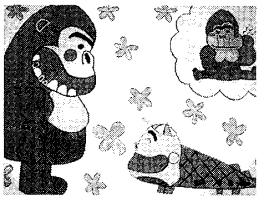
②紙芝居（ライオンに出会った場面）



③原作絵本（ゴリラに出会った場面）



④紙芝居（ゴリラに出会った場面）



## アンケート調査の実施

前述のような，紙芝居の制作と付属幼稚園での上演活動についてのアンケート調査を実施した。

1）対象：表現遊び研究会１年生40名
（平成17年度入学者）
2）実施日：平成18年２月15日
3）アンケート項目
① 実際に子どもたちに紙芝居を演じた感想
② 紙芝居の台本制作について
③ 効果音や歌の挿入について
④ グループ活動について
4）アンケート形態：自由記述

## アンケート結果

アンケートは，各項目自由記述であったため，同様の感想と思われる内容について，以下のようにまとめた。（重複回答有）

①紙芝居を演じた感想
◇子どもたちの反応がすぐにわかったのでよかった。 18名（45%）
◇最初は緊張していたが，演じる楽しさを知ることが出来た。 10名（25%）
◇表現力が身に付いた。 9名（22.5%）
◇人前で演じる難しさを知った。 7名（17.5%）
◇人前で演じる自信が少し身に付いた。 5名（12.5%）

②紙芝居の台本制作について
◇絵本から紙芝居への台詞を考えるのが難しかった。 16名（40%）
◇原作の内容を紙芝居向きに短くしたり，ふくらませることが難しかった。 15名（37.5%）
◇大きな用紙に絵を描いたり，色を塗ることは難しかった。 10名（25%）

③効果音や歌の挿入について
◇いろんな楽器や歌にふれることが出来，よかった。 17名（42.5%）
◇音や歌が入ることで，子どもたちが興味を持ち，紙芝居に夢中になっていたのでよかった。 17名（42.5%）
◇動きや音が入ることで，アニメーションに近いと感じた。 5名（12.5%）
◇紙芝居を自分自身が楽しめた。 4名（10%）
◇自分の知っている歌や楽器が少なくて，どんな歌や楽器音をいれたらよいのかわからず難しかった。 3名（7.5%）

④グループ活動について
◇皆で協力して作ることで仲間意識が出来，楽しかった。 32名（80%）
◇違うクラスの人と関われたのでよかった。 11名（27.5%）
◇集まりが悪く不満に思った。 5名（12.5%）

## 考察

アンケート項目①紙芝居を演じた感想では，「子どもたちの反応がすぐにわかったのでよかった」という意見が最も多かったが，その内容としては，「子どもたちが一緒に歌ったり，振りを付けたりしてくれたこと」「意外なところで子どもたちが興味を持ってくれたり，静かに見てくれたこと」「あまり反応がなかったりすると不安になったが，拍手を沢山してもらえて嬉しかったこと」等が書かれてあり，自分たちの演じた結果をすぐに子どもたちの反応に見ることができ，一喜一憂しながらもそのスリルを味わうことで，人前で演じる楽しさや難しさを知ることが出来たのだと思う。

このように，紙芝居を通して子どもたちとの

コミュニケーションを体験したことの意義を学生が評価認識している点において，演じるという表現技術の向上や，表現するということに対する意識の向上を図ることが出来たと考えてよいのではないだろうか。

アンケート項目②紙芝居の台本制作についての感想では，「絵本から紙芝居への台詞を考えるのが難しかった」「原作の内容を紙芝居向きに短くしたり，ふくらませることが難しかった」と述べている学生が約８割近く見られる。これらの意見内容として，「紙芝居と絵本の違いがわからなかった」「紙芝居の特徴がわからなかった」等の記述が多く，それぞれの特徴や違いについての知識のないままに，絵本から紙芝居への台本制作に取りかかったことが，台本制作を困難にした原因と思われる。結果的には，作業をおこないながら絵本や紙芝居について学ぶことは出来たのだが，それぞれを系統立てて学ぶには至らなかった。

アンケート項目③効果音や歌の挿入についての感想では，「いろんな楽器や歌にふれることが出来，よかった」「音や歌が入ることで，子どもたちが興味を持ち，紙芝居に夢中になっていたのでよかった」という感想が述べられ，楽器や歌の知識が広がったことが窺える。またその理由として，音楽の多様性や魅力，イメージと音のつながり，合奏以外での楽器の使い方等を知ることが出来てよかったということが書かれており，音や音楽が身近になったのではないかと思われる。

その他に，「音や歌が挿入されることで，紙芝居を自分自身が楽しめた」という記述もあり，まついのりこ氏の「演じ手は紙芝居の世界を自分のパーフォーマンスの道具に使ってはならない」という考えに相反する状況も見られるのだが，学生たちにとって，演じるということを楽しみながら学ぶ手段としては，音や歌の挿入は有効ではないかと考えられるのである。なぜならば，表現技術の未熟な学生の場合，話術だけで子どもたちを惹き付けることは相当困難であり，音や歌の挿入は，学生にとって子どもたちとのコミュニケーションにすぐに応用できる数少ない手段のひとつだからである。しかし，それらは充分に配慮しながら挿入することが重要であろう。

アンケート項目④グループ活動についての感想では，「皆と協力してひとつのことをやり遂げる喜びや連帯感の感受」が最も多く書かれている。その他にも，「これまで話したことのない人と話すことができ，いろいろな意見を聞くことができた」「新しい友だちができた」ということもグループ活動の大きな魅力であろう。もちろん，集まりが悪く一部の人に負担がかかったグループもあり，集団での活動の難しさも経験したと思われるが，それらも含めて，大型紙芝居を制作上演するという取り組みは，グループ活動としても有効であると考えられる。

以上のような結果から，総合的な考察として，保育者を目指す学生にとって，大型紙芝居の制作と上演活動は，演じるという表現技術だけではなく，言葉表現を豊かにするとともに，絵画や音，歌の知識を広げるなど保育者に必要な表現技術を学ぶことができる総合的な活動で，そしてそれらの技術を身に付けていくことで，コミュニケーション力を高めることの出来る有効な活動であると言えるのではないだろうか。

確かに，この６ヶ月間の大型紙芝居制作の取り組みは，学生のみならず教師にとっても負担の大きな活動であった。けれども，ようやく作品が完成した時の喜びと安堵感，一生懸命紙芝居を演じる学生たちの姿や，それを楽しむ子どもたちの姿に励まされ，筆者自身の次への表現技術指導に対する意欲へとつながったのである。

**【付記】**

この大型紙芝居制作にあたり，制作した紙芝居がよりよく上演できるようにと，快く枠制作を引き受けてくださった長柄正雄氏に紙面を借りて御礼申し上げます。

**＜参考文献＞**

1. 安藤哲也　金柿秀幸　田中尚人　「絵本であそぼ！」

小学館　2005
2. JAM ネットワーク　「じぶん表現力」　主婦の友社
2002

＜図版出典＞

①③. あきやまただし　「ひまわに」　PHP 研究所
1999
②④. 別府大学短期大学部初等教育科表現遊び研究会
「創作紙芝居」　2005